

### 3・11を契機に体当たりの生きかたを展開する山本太郎

「脱原発」を積極的に発言し、デモにも参加していた俳優の山本太郎(36)が、「ツイッター」に原発事故に関する発言が原因でドラマを降板したと呟いて話題になり、その後、迷惑をかけられないと所属事務所も辞めたことがツイッターで明らかにされたと、5月下旬の新聞に報道されたことがあった。そのときは何年か前に観た彼主演の映画の主人公そのままの直情径行で、思い切り跳ね上がって生きるピチピチぶりが芸能界を突き破って、現実の路上に躍り出てきた感じで受けとめていた。脱原発が親原発かにかかわりなく、大半の若者がどこでもうつむいてケータイをいじくってばかりいる日常の光景の中で、飛び切りの生きの良さが久々に損に囚われず登場したことに、自分の中で高揚する気分になったことを覚えている。

それからは福島や「脱原発」の集会などで声を上げている彼の映像がよく目に留まるようになったが、『週刊現代』(2011/8/6)に「僕は最後まで闘う」という見出しの彼に対するインタビューが掲載されているのを知り、遅れて入手し目を通すことになった。彼が所属事務所を辞めることになったきっかけは、彼の活動に対する抗議の電話が事務所に殺到したことにあったという。彼の活動への励ましではなく、抗議であるところに不審な感じがするが、彼はそこで〈反原発活動を止めるか、事務所を辞めるか〉の決断を迫られ、〈お世話になった人たちに、これ以上迷惑はかけられない……〉と判断して、社長から慰留されながらも、踏み切ったと語っている。

〈3・11以降、眠れない日々が続きました。本心では、原発は危険だと声を上げなければならないと思っている。でも、その時にはまだ俳優を辞めてまで行動を起こす覚悟もなかった。心の中で葛藤する日々。〉

文科省が、子供の年間被曝許容量を20ミリシーベルトと定めた時、国は本気で子供たちを見殺しにすることを決めたんだと確信したんです。目先の利益を優先、そのためなら国民が犠牲になっても仕方ないという日本政府の姿勢に、激しい怒りを覚えました。だが、自分は？ 生活のため、と上げるべき声を上げていないではないか。〉

この箇所を読んで、彼が自分の生活を問いなおすところで原発問題を考えていることが伝わってくる。自分の生活と切り離されたところに原発問題をおかなかったのだ。つまり、口で原発反対をいくら叫んだところで、自分の生活が原発を支えていることを彼は直視して誤魔化さなかった。問題は原発にあるよりも、原発を選択せざるをえないような自分たちの生活にあるのではないか。そのことに気づくなら、自分を拘束している自分の生活に衝突することなしに、原発であれ、どんな問題であれ、本気に取り組むことなどできないのではないか。ポーズではなく、おまえが本気なら、自分のこれまでの生活にむかってその本気を問うてみよ。彼は「自問のバリケード」を自分に張りめぐらしつつあったのである。

〈そんな中、ソフトバンクの孫正義社長がツイッター上で原発賛否を問うアンケートを行っているのを知りました。参加するかどうか、もちろん迷った。役者である自分がここで実名を挙げて原発反対を叫ぶことは、いよいよ待ったなしの状態になるかも知れない。「お前、本当に心の準備ができていいのか？ 覚悟はあるのか？」と自問自答。結局、「反対」「黙ってテロ国家日本の片棒担げぬ」と書いてしまった。数値を誤魔化し、世界の共有財産である海や空にこっそり汚染物質をばら撒く国を許せなかったんです。〉

初めて「宣戦布告」した瞬間、堰を切ったように涙が溢れました。何かを失うかも知れぬ不安、後悔の涙じゃない。これまで、本当の自分を押さえつけ、言うべきことも言えずにいた。声を上げた瞬間の涙は、本当の自分を取り戻した、解放の涙でした。

俳優としてではなく、人間としての自分の本心が言えぬなら、そんな嘘くさい人生など生きていても仕方ない、と思ったんです。〉

原発反対の意思表示において「宣戦布告」したと捉えるよりも、自分にむかって、これまでの自分の生きかたにむかって「宣戦布告」したと捉えたほうがいいかもしれない。原発反対の「宣戦布告」

は目標の不明確さによって曖昧になってしまうのに対して、自分に対する「宣戦布告」は自分が生きているかぎりの永続性としての意味を帯びているからだ。自分が自分に衝突しつづけるなかにしか、「宣戦布告」は生きつづけないからである。そのように考えるなら、彼が流した涙は〈本当の自分を取り戻した、解放の涙〉であるよりは、もう後戻りはできない、未知にむかって突き進むしかない自分からのこれまでの自分に対する哀悼の涙ではないのだろうか。

反原発活動をはじめたころ、〈案の定ドラマを降ろされ〉たことについて、〈テレビ局や番組側からの説明〉はなく、〈予測の範囲内だったとはいえ、ああ、本当にこんなことがあるんだなとショックでした（笑）〉が、そのことについてのツイッター公表は、〈芸能人が反原発を叫ぶと、生活が脅かされる事実が確かに存在するということを、大勢の人々に知らせたかったからです〉と語るが、生活が脅かされるのは芸能人ばかりではない。おそらく日本のサラリーマンで会社に気兼ねすることなく、反原発を大きく叫ぶことの自由を味わうことのできる者はほとんどいないと思われる。“余分なこと”は何も言わずに黙々と与えられた仕事をそつなくこなす、そんな職場になってしまっているというのが、つい最近まで労働してきた者の実感である。

俳優として名の知れた彼であったからこそ、メディアで注目されることになったのであり、一般の職場では取り上げられることもなく黙々と排除されていっているのが現実であろう。不況で個々人の生活も職場も社会も縮こまって、じわじわとファシズム的な空気が醸成されていきつつあるなかでの3・11であり、彼は勇気を振るって〈そんな嘘くさい人生など生きていても仕方ない〉と声を上げたのである。反原発の声以上に、声を上げたということ自体が大きな意味を持って、声を上げにくい職場で働いている人々に励ましの影響を与えつづけていることが重要なのだ。

芸能界の友人が「勝算はあるの？」と言ったことも語られているが、その声は勝算がなければやるな、損をみるだけという、損得だけで物事を判断する社会の一般的な風潮を代表しているが、人間というものは勝算を超えたところで生きようとする存在であることを知らないし、身近に教わったこともない気の毒な人であるというほかない。もちろん、「勝算はある」。自分が戦いつづけることができるということが、なによりの勝算である。戦いつづけるかぎり、負けることはありえないのだから。

政治家になることを勧める声もあったらしいが、もし彼が政治家を目指すことになれば、彼が〈反原発活動を止めるか、事務所を辞めるか〉の決断を迫られて悩み抜き、自分のこれまでの生活のありかたに「自問のバリエード」を張りめぐらして、涙を流した解放感から遠ざかることになってしまう。そして反原発問題をエネルギーの政策次元に閉じ込めて、反原発が反生活の意味を内包している問題の重要性を「汚染物質」を海や空にばら撒いて拡散させていくように、私たちの生活の闇の中に拡散させていくことになるのである。菅前首相が市民運動出身であったということを思い返しても、市民運動家が政治家になってもロクでもないことになるだけであることを、私たちはこの3・11の中で十分学習してきたのではなかったか。

事務所を辞めた彼は舞台の仕事が舞い込んできたことから、俳優を続けることを決心し、〈役者を続ける限り、僕の活動をメディアが取り上げてくれるから〉と、役者であることの利点を逆用していくことを語っているが、大いに賛成である。政治家転身への野望を一時的に押さえ込まれるという理由だけからでなく、それ以上に俳優がなにかの声を上げ、活動すれば、仕事から引退せざるをえなくなるという悪習や慣行を打破するためにも、彼は俳優を辞めてはならない。なにかをすれば食えなくなり、そのことを心配してなにも言えなくなるというような私たちの世界を変えるためには、彼は俳優を続けるべきだし、サラリーマンもまた“余分なこと”を考えて、それに熱心に取り組むべきであり、原発事故は関係者たちが“余分なこと”を全く考えてこなかったからこそ起きたことをみるなら、今ほど原発事故関係者たちが反原発の声を上げるほどの自由が求められていることはないだろう。

最後に、インタビューで大変心温まったエピソードに触れておくと、佐賀県庁前の抗議デモで彼が警備員に取り押さえられている写真がスポーツ紙に掲載され、「山本太郎大暴れ」と報道されたことに彼はこう説明している。〈あの時は、警備員の向こう側に取り残されたデモ隊の女の子3人を、戻そうとしているだけだったんです。それが、デモ隊の先頭に立ち、県庁に突入、みたいになっちゃった（笑）。〉彼の心優しさが舞台を超えた路上で演じられており、優しさの気持が一見過激と受けとめられる行動として発露されることを、このエピソードは物語っている。